

黄土の奔流

生島治郎



こうど ほんりゅう
黄土の奔流

いくしま じろう
生島治郎

© Jiro Ikushima 1977

昭和52年7月15日第1刷発行

昭和61年9月1日第9刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価440円

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。(庫一)

ISBN4-06-136070-1 (1)



講談社文庫

黄土の奔流

生島治郎

講談社

目次

第一章	夢やぶれて
第二章	すみれ色の眼の女
第三章	生命は保証せず
第四章	黄色い河
第五章	虫けらのように
第六章	銃撃戦
第七章	濁流と死と
第八章	白い黄金
第九章	虚々実々
第十章	長恨歌

解説

星
新一
三六九

三三六 三〇一 二六三 二三四 一八九 一六三 一二〇 七三 四六 七

黄土の奔流

第一章 夢やぶれて

車は重く、道は遠かった。

乗せている客がどんな風体ふうていの男だったか、どこへ乗せてゆくつもりなのか——いや、それどころか、なんのために今自分がこうして車をひいているのかもわからなかった。ただ、得体の知れない力が彼を駆りたて、いっさんに走らせていた。彼はあえぎ、よろめき、汗を流した。汗が眼にはいり、とても眼をあけていられない。脚がもつれる。眼をあけなければいけない——眼を……。

紅真吾くれないしんごは眼をあけた。

夕闇ににじんだクリーム色の天井が、まだすっかり夢から覚めやらぬ眼に、ぼんやりとうつた。大きく伸びをすると、彼は、ゆっくり身を起こした。気のせいか、身体中からだじゅうの筋肉が痛む。現実に車をひきつづけたあとのように……。

(まさか……)

と彼は苦笑した。

筋肉が痛むのは、このところ過労気味だったせいにはない。この二、三週間、ほとんど飲まず食わずで金融にかけずりまわったのだ。もちろん、睡眠もとれなかった。眠る時間があつたとしても、おそらく、眠れなかったろう。破産寸前に追いこまれた男に、安眠しろと言っても無

理な話だ。

彼は枕元の時計に眼をやった。七時半だった。眠りについたのは、もう夜明けちかかったが、それでも十二時間以上も眠りつづけたことになる。あらゆる手をつくし、家財を売り払ったあげく、社を解散と決めたのが三日前、一昨日には社員たち——と言っても中国人を含めて二十三人だけだが——の身のふり方を決めて退職金を渡し、昨日は邸を売り払う手はずをととのえて、召使い全部にひまをやり、そうしてやっと身ひとつになつてから、ベッドへ転がりこみ、こんこんと眠りつづけて十二時間余……。

「無理もないさ」

と彼は呟いた。

「たとえ、悪い夢を見たつて眠れないよりましだ」

そう、たしかに、悪夢のほうがこの世知辛い現実よりましだ。たとえ、車をひき、汗みずくになつて走りつづけたとしても。

真吾はベッドからおりて、スリッパをつっかけ、なんとなく寢室の中を歩きまわった。淡い緑色の絨毯の上には家具をとりのぞいたあとがはつきり濃淡を見せて残っている。かつては、さまざまな家具と骨董類にとりかこまれ手ぜまに思えたこの部屋も、今は洋服箆笥とベッドがあるきりで妙にひろびろと感じられた。まるで空家のように埃くさい臭いがあたりにたちこめている。

正面の壁にただひとつ写真の額が飾つてあった。濃い眉、強情そうなたくましい顎、明治風な八の字髭をのぞけば、どこことなく真吾に面影の似通つた男の写真だった。真吾はそこで立ちどまり、写真を見あげた。

（おやじさん、やっぱりだめだったよ）

と真吾は心の中でその写真に呼びかけた。

（あんたが死んでから、おれはおれなりにずいぶんがんばってみたんだが、やっぱりだめだった。上海にも日本の一流商社が進出してきてね、おれたちみたいなちっぽけな商社じゃとても太刀打ちできなくなった。それで、奥地へ手を伸ばしたんだが、売掛金は回収できないし、おまけに……）

（愚痴はよせ）

父親の聞きなれた声が真吾の耳によみがえってきた。

（愚痴なんか、いまさら言ってもはじまるまい。それより、これからどうする気だ？）

（さあ、どうするか……）

真吾は首をかしげた。

（とにかく、きれいさっぱり無一文だ。あんたとおれとでようやく手に入れた土地も杜屋も骨董類も売りはらった。この邸も明日には出てゆかなきゃならない）

（それじゃあ、内地へひきあげるか？）

（冗談じゃないぜ、おやじさん）

と真吾は笑った。

（あんなせま苦しいところへ今さら帰れるもんか。もう一度やり直しさ。たとえ苦力になっても、もう一度どん底から這いあがって、一旗あげてみせるぜ）

（おまえも、おれに似て強情な男だな）

写真の顔もにやりと笑ったような気がした。

（まあ、いいさ。おれも内地が肌にあわず、上海に追いだされてきた男だ。おまえもここで好きなことをやってみるさ）

「紅先生……」

その時、間のびした声が背後から聞こえ、真吾はふりかえった。寢室の扉の間から、青々と剃りあげた大きな頭がのぞいていた。頭のわりにはひどく小さい眼がとろんと真吾の顔をみつめている。

「ああ、飯桶か」

と真吾は上海語で言った。

「どうして、おまえはまだ残っているんだ」

扉をあけ、窮屈そうに身をかめながら、男は部屋にはいつてきた。二メートルはゆうにありそうな大男だった。青い木綿のシナ服がはちきれそうなたくましい肩はばをしている。

「みんななくなっちゃったのは、なぜかね？ 紅先生」

舌ったるい口調で尋ねると、男は大きな掌でぶ厚い唇をぬぐった。細く小さな眼、平たい鼻、ぶ厚い唇がこの大男をなんとなく間のぬけたものに感じさせる。

「昨日もさんざん教えてやったのにまだわからないのか飯桶……」

真吾はうんざりしながら言った。

「おれは破産したんだ。つまり、金がなくなつて、おまえとおなじぐらい貧乏になったから、おまえを雇つてはいられなくなつたんだよ」

「先生がおれとおなじ？」

大男は不思議そうに真吾をみつめた。

「先生も車をひくかね……？」

「そうじゃないよ」

と言いかけて、真吾はあきらめた。大飯ばかり食ってなんの能もないというところから、仲間の苦力たちに飯桶とあだ名されたこの頭のにぶい車夫に、いくら破産の説明をしてやってもわかってくれそうもなかった。

「いいか、飯桶。おまえに昨日十元やったろう？ あれを持って故郷へ帰れ」

「おれ、故郷へ帰りたくねえ。故郷へ帰れば黄包車ワンバオツォをひけねえからな」

「それじゃあ、上海に残って街の車ひきでもやるんだな。うちの車はおまえにやったんだよ……」

「それでも、おれ、先生をのせて走るのが好きだから」

飯桶は上衣の中へ手をつっこみ、しばらくもそもそしていたが、やがて十枚の銀貨をとりだすと、掌にのせて真吾の方へさしだした。銀貨はどれも汗に濡れて光っていた。

「これ返すよ、先生。そのかわり、ずっとおれの車にのることにしてくれないかな」

真吾は言葉につまった。この頭のにぶい男は真吾をのせて車をひくことが唯一の生きがいらしい。大きな掌を押しもどしながら、彼は言った。

「わかったよ、飯桶。おれとしばらく一緒に暮らすことにしよう」

飯桶はうれしそうににやりと笑って、寝室から出ていった。

その後ろ姿を見送り、真吾は溜息をついた。明日にもこの邸を追いだされるというのに車夫を抱えてどうするつもりなのだろう。二人とも飢え死にするのがオチではないか。もったも、飯桶

は真吾が飢え死にすれば、その死骸を車にのせて走りかねない男だが……。

「まあ、いいさ」

と彼は呟いた。なんとかなるだろう。この広大な土地に、おれと飯桶の二人ぐらいなんとか生活できないはずがない。こうなると、いつそ破産してしまつたほうがさっぱりと度胸がすわつた。

枕元の時計の横に一通の封書と新聞が置いてあつた。真吾はそれをつかむと、ベランダの方へぶらぶらと歩いていった。ベランダからは通りひとつへだてた公園が見える。新公園と名づけられたこの公園は公園というよりも、運動場と言つたほうがふさわしいほど野球場やテニス・コートグラウンドがたくさんしつらえてあつた。グラウンドには人影がなく、そのまわりをめぐる散歩道を、薄いグレーの背広にグレーのホンブルグ帽をかぶつた白人が一人、ゆっくりと散歩していた。悠然とステッキをふり、まるで自国の公園を散歩しているようなくつろいだ姿だつた。

(英国人だな)

と真吾は思つた。

(ハイド・パークでも散歩している気になつていやがる)

彼らはどこへ行つても自国の習慣を変えようとしなない。ロンドンでの生活をそのまま他国へ持ちこむのだ。たとえ、そのために「犬と中国人ははいるべからず」と公園の入口にはりつけても……。

むかつ腹を立てている自分に気づいて真吾は苦笑した。自分もまた、中国人にとっては、そのよけいな侵入者の一人にすぎない。いや、同じ東洋人であるからこそ、英国人よりもかえつてがまんのない存在かもしれない。しかし、真吾自身はもうなかばこの国が自分の故郷とし

か感じられなくなっている。彼は手に持った邦字新聞に眼を向けた。『大正十一年八月二十三日』という日付けが眼にはいり、彼の濃い眉がぴくりと動く。八月二十三日は彼の誕生日だった。

(三十二回目の誕生日に破産とはな……)

新聞をひらき、『宜昌の情勢險悪化す——軍閥、土匪と交戦、連絡船再び不通』という文字を読みとると、眼を光らせて記事を読もうとしたが、思い直してそのまま新聞を丸めて床に捨てた。宜昌の方には何千元かの未収金が残っている。しかし、その取引先はとうに姿を消してしまっていた。

(この広い中国大陸を捜しまわるわけにはいかない。未練は捨てることさ)

自分に言いきかせて、彼は封書の方に視線を向けた。右肩あがりのくせのある文字は誰からの便りかすぐにわかった。中学時代の友人、橋田雄三からのものにちがいがなかった。

『前略』

だいぶ便りがないので心配している。貴君の先便では、各地で軍閥が動きだし、土匪の横行もはげしく、奥地との取引きがうまくいかぬとあったがその後如何？ 小生なぞには、軍閥の奉天派も安徽派も直隸派もわからぬが、なにやら日本の戦国時代を思わせるようでおもしろい。いや、内地にいるから、おもしろいですまされようが、その中において商売をやろうという貴君にはおもしろいどころではなく、心労なことだろうとお察しする。

もつとも、貴君なぞはせまい内地にいるより、広大なシナ大陸で思う存分腕をふるったほうが本望だろう。小生は大学を出てから十年、あくせく学閥の谷間を這いまわって、ようやく助教教授になったばかりだ。これから、教授になるまで何年かかるか、いっそ気が遠くなるぐらいだ。と

きどきは、すべてを投げうち、シナ大陸へわたって馬賊にでもなったら、どれほど痛快かと思う。しかし、もはや妻子もいる三十余歳の身となりては、シナ大陸に雄飛するわけにもいくまい。せめては、貴君の便りにうさをはらすばかりだ、呵々」

真吾は手紙から視線をあげた。橋田のうさをはらしてやるような便りはもう書けない。

（破産したと書いてやったら、橋田はどんな顔をするだろう？）

と真吾は思った。

十五年前のあの時と同じように、橋田は手をさしのべようとするだろうか？

十五年前の真吾と橋田は京都府立一中を卒業したばかりだった。橋田は三高へ進み、真吾はそのまま上海へ渡るつもりだった。長くつづいた民事訴訟に破れ、ほとんど財産を失った父から、ただひとつ上海に残った紅貿易公司ゴシヌを拠点に再起をはかる決意をうちあけられた彼は、それでも上級学校へ行くとは言えなかった。

今でも、賀茂川かものがわの清らかな流れと、それに向かって力いっぱいほうりこんだ黒いすべすべした石の感触を真吾は思いだすことができる。

小倉こくらの制服を着た丸顔の橋田は、その隣で沈痛な面持ちをしていた。

「どうしても、上海へ行くのか？」

と彼は訊きいた。

「ああ、どうしてもだ」

と真吾は答えた。

「もったいないじゃないか。せっかく学校推薦では入れるのに……」

「無試験ではいつでもあとの学資が続くそうもないからな」

「学資のことなら……」

橋田は友人の顔を盗み見て口ごもった。

「その、こんなことを言って失礼だが、ぼくがおやじに話して……」

「いや、いいんだ」

と真吾はさりげなく言った。橋田の家は河原町かわらまちで大きな呉服問屋をしている。橋田が頼めば真吾の学資ぐらいなんとかしてくれるだろう。しかし、他人の世話になることを、あの強情な真吾の父がだまって認めるかどうか、それぐらいなら、どんな無理をしても、自分で学資を送ると言いだすにちがひなかった。

「三高へ行くやつはたくさんいる。しかし、上海へ行けるのはおれ一人だからな」

真吾は快活にそう言つて、もうひとつ河原の石を投げこんだ。

その言葉どおりに三高進学を捨てて上海へ行くことを望んでいたわけではなかった。三高進学は真吾にとつても、輝かしい前途を約束していたはずだった。その道を歩いてゆけば、三高、帝大、助教授、教授と、橋田と同じ道が真吾にもひらけていたかもしれない。

夕闇に橋田の手紙がぼんやり白く浮かんでいる。真吾はそれを静かに封筒へ戻した。

（おれはふりだしにもどつたのだ。十五年前と同じ、ふりだしに……）

いや、なにもかも同じというわけではない。あのころの彼は若かったし、未知の世界に賭けようという情熱に燃えていた。今は——そう、今はもうそれほど若くはないし、この中国が、すば